会　議　記　録

高松市附属機関等の会議の公開及び委員の公募に関する指針の規定により、次のとおり会議記録を公表します。

会 議 名	令和２年度第２回高松市創造都市推進審議会
開催日時	令和３年２月１５日(月)　１３：００～１５：００
開催場所	Ｗｅｂ会議（来場者用：四番丁スクエア１階　第１会議室）
議　　題	（１）第２次高松市創造都市推進ビジョンにおける取組について （２）新型コロナウイルス感染症の影響と主な対応について （３）その他
公開の区分	■　公開　　□　一部公開　　□　非公開
上記理由	
出席委員	佐々木会長、真鍋副会長、西成委員、大久保委員、三井委員、中西委員、藤田委員、平野委員、原委員、植中委員、篠田委員、杉ノ内委員
事 務 局	長井創造都市推進局長、石川産業経済部長、 吉田文化・観光・スポーツ部長、西岡産業振興課長、 末原農林水産課長補佐、石原施設整備室長、黒田観光交流課長、 三宅都市交流室長、高本スポーツ振興課長、 宮脇産業振興課長補佐、三浦産業振興課創造産業係長、 松下産業振興課主任主事
傍 聴 者	１　人　　（定員　３　人）
担当課及び連絡先	産業振興課　創造産業係 ８３９－２４１１

審議経過及び審議結果
１　開会 （市長挨拶及び出席委員による自己紹介） ２　会長選任等について 三井委員が佐々木委員を会長に推薦し、他の委員も承認。

審議経過及び審議結果
【会長】 　このコロナの状況の中で、社会の在り方を根本的に考え直す必要があるようなことが、多々、見受けられる。私としては、創造都市という考え方自体も世界的に再設計することになるだろうと考えており、ある意味、この機会をもって、高松は最先端の創造都市になると思っている。この審議会で、生活の質をどう高めるか、あるいは、文化芸術やスポーツといった人間にとって大切な活動をどうやったらうまく持続させられるのかといったことを、多方面から御活躍いただいている皆様とお互いに話し合い、刺激しあって、よりよい深みのある議論を重ねていきたいと思っているので、どうぞ御協力をお願したい。 　　佐々木会長が真鍋委員を副会長に指名。 【副会長】 　御指名いただき光栄である。微力ではあるが、商工業を代表する立場から一生懸命務めさせていただくので、会長を始め、皆様方の御指導をよろしくお願い申しあげる。 ３　議題（１）第２次高松市創造都市推進ビジョンにおける取組について 【事務局】 　（配布資料について説明） 【会長】 　それでは、この議題に関連して、事前に質問等をいただいた委員がいらっしゃるので、内容について御説明願いたい。 【委員】 　交流プロジェクトの「屋島活性化推進事業」に関連して、「与一まつり」を提案したい。私の住んでいる牟礼町には「与一くん」というイメージキャラクターがあり、栃木県大田原市では、与一が幼少の頃を過ごしたということで、イメージキャラクターがあって、毎年、壮大な祭り

で賑わっているようである。また、岡山県井原市には「与一の墓」があり、「与一を偲ぶ古典芸能祭」が開催されている。そこで、両市との交流を図り、屋島で合同「与一まつり」を毎年開催できるようになれば、相互乗り入れの開催による観光交流が図れ、今後の発展が望めるものと期待できる。

【会長】
　那須与一ということで、歴史的なストーリーもあり、屋島という点からもおもしろいかもしれない。この御提案に関して、事務局からお話しいただきたい。

【事務局】
　御提案の「与一まつり」に関して、本市としては、現在、那須与一だけでなく、源平合戦に関係する、例えば、義経や弁慶、静御前といったところを含めた、４０の市町が、毎年、持ち回りで開催している合同サミットに参加している。令和３年度については、岡山県井原市での開催予定である。本市としては、現在、屋島山上交流拠点施設の整備を行っており、令和４年度には完成予定であることから、井原市の開催の翌年度には、屋島山上を舞台に合同サミットを開催する方向で検討をしているところである。御提案の内容については、この合同サミットの中で、屋島のＰＲや魅力発信を積極的に取り組んでまいりたいと考えている。

【委員】
　「むれ源平石あかりロード」においても、那須与一が足場とした駒立岩も今現在いっぱい残っているので、事業の中でも、そこに注目していただける状況は作っている。具体的には、絵を書いて、実際は、この距離を射たっていうことを現場で見ていただいているが、なかなかの反応があった。それから、事務局から話しがあった山上拠点施設については、現在、屋根瓦を庵治石で作るという壮大な話で、今、必死で作っている。また、間違っていたら申し訳ないが、次の大河ドラマの最初の頃に、源平の古戦場という話が出るのではないかという話を耳にして、そういう意味ではタイムリーではないかという話が出た。ただ、昨年は、コロナ禍ということもあり、事業をやって、もし感染症が拡大したときに申し開きができないということで、涙を飲んで中止にした。今年に関

しては、期間を３週間ぐらいで、少し暑さがやわらぐ９月に入ってから行いたい。ただ、これも委員会でずいぶん紛糾したのだが、地元住民から「感染症が拡大したらどうするのだ。迷惑だ。」という声が出る可能性は常にあるだろうと想定される。委員会としては、よかったねという声もいろいろあるので、こういう時にはこういうふうにするという説明をしながら、是非、開催したいと思っている。コロナ禍で難しいかもしれないが、例えば、将来的な話で、時期にもよるが日が重なれば、高松市のイベント等で御協力できる部分もあるかと思う。

【委員】

芸術士派遣事業については、２００９年に始まり、その３年後には高松市の自己財源で行っているという、全国でも唯一と言っていいほど、稀有な事業であるが、１２年目にコロナ禍になったこと、また、昨年の会議の時に報告したとおり、残念ながら予算が削られてしまったことから、訪問回数が今まで４８回のところが４０回に、幼稚園は４１回のところが３３回に減少してしまった。回数については、そういったこととコロナ禍が重なってしまい、始まりが６月からということで、十分に４０回と３３回が消化できるか不安だったが、なんとか訪問できるようになって、今も活動できている。

１２年目を迎えて初めて、保護者の方々にアンケートをとってみて、報告書としてまとめている。今の時代なので、スマートフォンから入力できるようプログラミング設定を行い、高松市内一円の芸術士が行っていない幼稚園も含めた３，５００の保護者の方々にアンケートをしたところ、８園以外のほとんどの施設、１２０ぐらいの施設の方々から御意見を返していただいた。その結果については、昨年の１０月に、メディアの方々や議会の先生方にも来ていただいて報告した。今回、その報告書や、子どもたちの日々の記録のドキュメンテーションの本が先週の土曜日にできたので、また、委員の皆様には配布させていただきたいなと思っている。その報告の中で、親御さんの赤裸々な感想とか、子どもたちの様子が手に取るように分かり、子どもたちが家に帰ってこんなことをしたのだっていうことを、家の中でのイミテーションとして飾ってもらっているということも見受けられた。

来年度については、この会議資料にもあるとおり「改善継続」であるが、どう改善するのかというところの相談が昨年末ぐらいから始まって

おり、予算は増えないけど、より改善したいということだったが、予算を増やしてというお願いを何度もしたが、できないとのことだった。正確には３月の議会が通ってからの発表になると思うのだが、今のところの見通しとすると、今まで４３の施設に派遣されていたのを、手を挙げてくれている施設が７６ぐらいあり、その園の全部に行かそう、ただし、回数が半分でという話になっている。手間暇が倍になるけれども、回数は半分だなっていうような質問も来たが、前向きにとらえて、回数半分の２０回になって、隔週で各園の方に、５月から２月までお伺いするというスタイルに変わって、希望するところには全ての園に芸術士を派遣しようということで、１３年目に大きく変わることになった。私立の施設の方に関しては、自己財源で呼んでいただけるのであれば呼んでくださいということで、今、私たちのスタッフが全員で、各園長さんの方に営業して、個別に呼んでくださいねということで、話をしている。１３年目に大きく仕組みが変わって、高松市の派遣制度、プラスアルファの派遣という仕組みに変わる。

また、やはりコロナ禍の影響で、全国からの視察ができなくなったので、オンラインで視察をするというようなことも少し実験的に始めており、今年４月からは、もう少しその頻度を増やして、関係する学生さんや保育士の先生方、大学の先生方も含めた研修会なり、ミーティングをオンラインで定期的にやっていこうかなと考えている。

【会長】

事業の方向性というところで、会議資料では「拡充・継続・改善継続」と並んでいるが、言葉だけ見たら、改善継続というと、継続よりもっと規模や効果をもったものかと思ったが、どうも、継続よりもちょっと予算を減らすが中身を考えたとかいう、そういうニュアンスなのか。民間の保育園からの支援も含めて、多様化して取り組まれるのは結構だと思うが、できれば年度末にでも予算がもし余れば、補正で追加していただきたいと市役所の方にお願いしたい。この芸術士派遣事業は、イタリアの保育園から全世界に広がっており、日本でも全国の市長さんたちや保育園関係者が関心を持っている。私は、今、金沢にある稲置学園という幼稚園から大学まである総合学園の理事をやっており、幼稚園の教諭の方々、園長さんも、この事業に関心を持っている。そういったことからも、高松の創造都市事業のシンボル的な意味合いがあるので、是

非、予算をがんばってして欲しいと思う。

【委員】
学校巡回芸術教室についても、昨年は、コロナ禍で、ほとんど開催されていなかったが、１つ依頼があって呼ばれた学校があった。そのときは、緊急事態宣言前で、学校の方もきちんと対策をしていただいて、人数も分散して開催することができた。学校の方でも密にならないよう等、対策をとれば、こういう事業も開催できるし、また、コンサートや演奏会も徐々にみなさん開催されているところだが、大きい規模のコンサートを開催する一方で、高松市にたくさんいる芸術士の方たちが活躍できるような、小さい規模のコンサートや演奏会といったような、大きい会場でなくてもよく、屋外でも対応できる場合もあると思われるので、そういう活動ができるような場を設けていただいたらと思う。

【委員】
「高松盆栽の郷」が、昨年、春にオープンしたが、ちょうどコロナ禍のど真ん中ということで、静かなオープンとなったが、大変厳しい状況でオープンしてから一年、課題に取り組んでいるところである。国内の方はお越しいただいているが、インバウンドや海外の方は、この状況なので、まだまだ、今からという状況で計画段階である。盆栽だけでいうと、鬼無の状況で、取引高で海外が７割くらいである。国内の方は、このコロナ禍で鬼無を訪れる方が少なかったが、海外は、既にオンラインで取引されており、ほとんど変わらない状況である。写真のやり取りや各取引はオンライン上であり、事業者の方はストレスなく、今年度の盆栽については取引ができていたと思う。
年末になって、コンテナの運賃が２倍になり、輸送の面で苦労している。航空便でいうとコンテナが止まることで、空輸貨物の振り分けのしわ寄せが来ており、先月、南アフリカの御客様がいるが、通常であれば段ボール７０㎝角くらいで２０万円くらいだが、３倍近くの５０万くらいの値段になってしまい、輸送の段階でキャンセルということが出てきている。そのため、自ずと盆栽業界でも、コロナ禍でだんだんとデジタル化が進んでいくと思う。
工芸プロジェクトは、伝統、芸術、デザインということだが、個人的には、このコロナで文化とか芸術とか、いろいろ先に削られることが非

常に多かったが、人間として芸術とか文化というのは本当に必要だなと今回のコロナでつくづく痛感した。自分でも、すごくコンサートに行きたいし、お笑いも生で見たいと感じている。先に削られるとよく言われるが、人間の豊かさとして文化のありがたみというのを感じたところである。

【会長】
盆栽では、特に、海外との取引がオンラインで順調にいくが、物を運ぶという所がネックだという点は、やはり、デジタル化の限界というところなのだろうが、あわせて、これからの我々の社会の在り方として見た時に、例えば、盆栽が生活に潤いを与えるし、ますます、注目を浴びると思われる。この危機を上手く乗り越えていただきたいと改めて思う。

【委員】
創造都市推進ビジョンの事業に該当するのか分かりかねるが、ジョージア州エルバートンの高校生の交換留学生も、残念ながら、昨年はコロナ禍の影響で実施できなかった。ただ、日本の高校生とジョージア州の高校生のメールでの交流はいまだに続いており、こういう形ではあるが、いろいろがんばって長い交流をしている。子どもの話としては、牟礼北小学校や高松北中学校、北高校が、校外学習に来てくれている。そして今、牟礼に新たに、ナガレスタジオ　流政之美術館が開館しており、同じく地元の北高、牟礼中でセミナーをしており、館を公開して、皆さんに芸術に触れていただこうというようないろんな動きが、今回、出てきている。やはり、人と人が交流していって、そこでいろんな感動や刺激があったりするという中で、これが本当に大事なのであり、おそらく、このコロナ禍が終息したら、一気に花開いてくると思う。牟礼はナガレスタジオ　流政之美術館も含めて、高松駅前のデジタルサイネージで映像を流しているので、そういった事を続けながら、今、皆さんが鬱屈している交流が、いざ開始した時には受け止められるよう動いている。

【委員】
私どもの会社では、栗林公園の中にある明治時代に建てられた文化財

施設の商工奨励館という施設の運営管理を行わせていただいているが、文化財が公的な施設として、次世代に引き継がれるためには、そこに人が集って、その時代に応じた使い方がなされ、その時代に生きる人々に受け入れられてこそ、文化財施設というものも引き継げると思っている。ただ、見ているだけ、眺めているだけ、管理をしているだけでは、その良さやその価値というものを次世代につなぐことはできず、やはり活用されてこそだと思っている。その活用という面でいえば、人が集って、時間や空間を共有することであり、もちろん、その目的が芸術鑑賞であれ、例えば、食事であれ、スポーツであれ、場合によっては、展示会のような施設という目的であれ、様々な目的をもった人々の集いというものが大事なのではないかと思っている。

しかしながら、このコロナ禍において、大勢の人が密になるということは、最大の悪のように言われている。三密の最たるものとして、イベントやステージ鑑賞、文化芸術鑑賞、食事、我々の本業の結婚式もそうであるが、最大の悪のように言われている中で、背景として文化財施設、あるいは、地元の特性を生かした施設を使いながら、ハイブリット型というか、オンラインとリアルとの融合もデジタルの中で必要だということで、現在、デジタルイベントのプロデュースなども試行的にやっているところではある。やはり、人々の心の拠り所、心の交流という面では、場所の雰囲気等は最大のメリット、最善策だと思うのだが、なかなか難しいとなると、次世代に合わせて、背景はやはり高松市である、文化財施設である、あるいは高松らしい特色のある場所であって、そこに様々な会議なのか目的なのか、そういった目的を持ったことが、こういうデジタルの中でもできたらと思っている。例えば、今日の、この創造都市推進審議会も栗林公園発信だったりすると面白いかとも思う。

【会長】

この創造都市推進審議会は当初、様々な高松市の会場で開催していた。例えば、玉藻公園の中や高松市美術館の講堂、北浜アリーである。是非、状況が変われば、そういったところでやりたいと思う。

文化庁の方では、文化財を保護中心から活用の方向へ、法律が改正されており、様々な新しい事業がスタートした矢先だったので、このコロナ禍の中で困っておられるようだが、しかし、デジタルを活用して本物の魅力を伝えるといったことがうまく工夫されてきていると思う。例え

ば、大阪の山本能楽堂では、スマホで能が見られる。しかも、普通の客席だけでなく、かなり上からだとか、能面自体にかなり接近してみたりだとか、デジタル映像ならではの視点から楽しむことができる。交流プロジェクト自体が、やはりそれぞれの地域の持つ歴史的な本物の文化財というものがいかに、人をひきつけるか、感動させるか、そういうことになると思うので、委員が言われたようなことが全てだと思う。

【委員】
今の話を聞いていて思ったのだが、我々も、今、デジタルコンテンツを作っていて、例えば、思いつきなので可能かどうか分かりかねるが、高松市のホームページなり、高松市のどこかで、地場のいろんな方が作った映像を生かして、高松市がいかなるところか、どんな楽しいところか、どんなによいところかということを発信するようなものがあればよいのではないか。そうすると、我々も作る方に立つことができるし、皆さんも、今、お持ちのものがあろうと思われるが、それをまとめてあげるところがあるとよいと思うがいかがか。

【会長】
創造都市の事業をスタートさせる段階で、市民に広報する上で、街頭でかなり大きな映像を流すことをしていたと思うので、予算はないかもしれないが、創造都市推進局で何かそんなプロジェクトを独自に考えてもらいたいし、一方で、スーパーシティで予算が動くと思われるので、その中に創造都市のコンテンツをいれるといったことができないかと思うがいかがか。

【事務局】
只今の御提案に関して、本市はスーパーシティの申請に向けて取り組んでいるところであるが、それ以前から、スマートシティたかまつ推進協議会という場で民間の関係事業者等と連携しており、今回の御提案については、当該協議会の中で、デジタルコンテンツや情報発信等といった取組が可能かどうか、創造都市推進局と協議会の事務局であるＩＣＴ推進室と連携をしながら検討を進めさせていただきたい。

【会長】

現在、スマートシティやスーパーシティ系のものは、主にＩＣＴ系の情報産業の仕事をやっていて、そこに載せるコンテンツは、どちらかといえば創造都市推進局側にあるわけである。それをうまく利用していくことになると思うので、是非、これからデジタル方向にプッシュしていただくとよいと思われる。

【委員】

高松市のホームページの「観光・文化・スポーツ」のトップページにアクセスすると「エクスペリエンス高松」と出てくる。屋島、高松市美術館、高松産のごじまん品というような、大きなアイコンが見える。自身の住民票のある都道府県や市町村のホームページをしょっちゅう見ることはないかもしれないが、高松市のホームページは非常に見やすくて、魅力的なコンテンツになっている。

高松市美術館のボタンをクリックすると、ちょうど開催中の野口哲哉展の画像が出てくる。野口は国内外でも評価・人気ともに高い現代美術作家で、甲冑を着た武将の人物像が登場する作品展だ。香川県立ミュージアムでは１月下旬、主に中高生たちによって作られた、讃岐の甲冑の技術を用いた複製が展示されていて、それらを着るワークショップが行われていた。私はたまたま訪れることができたが、こうした情報が意外と市の内外の方々に伝わっていないこともある。外の人間だからこそ、決められた日程の中で、有効により多くの体験を得たいという欲望を持って行くので、いろんな情報を得る。もしかしたら、今日、御参加になっている皆さんも、灯台下暗しで香川県立ミュージアムや高松市美術館への来館頻度は高くないかもしれない。

観光とかインバウンドの旅行者を、外からたくさんの人を集めるというようなことができない中で、市内の人たちが、こうした地元の魅力をもっと意識付けや、啓発をするような仕組みというものができるのではないのか。

先ほど、栗林公園の話題も出てきたが、高松市は観光都市ということもあり、どこに行ってもＷｉ－Ｆｉが繋がるという利点がある。先ほども、スマートシティの話も出てきていたが、Ｗｉ－Ｆｉがつながるという利点は、例えば、広い栗林公園の中のバラバラの場所にいても、今日の様なミーティングを開催することもできる。仕組みをうまくデザインして、提供していくというようなことができれば、今あるコンテンツや

インフラを十分に生かしながら、いろんなことをできる可能性を高松市はお持ちだと私は思っている。その辺りは具体的にプランなどを考えて、実現できそうなら、お伝えする機会があればと思う。

【委員】

今日、この会議に入る前に、もう一回、創造都市は何なのかを考えていたら、やはり、こういう時期だからこそ越えられる力を自分の中に発揮することが、この考えだと思う。維持できる、環境にやさしい、全ての人を取り入れる環境を自分のまちを作るということが目的なので、このコロナ禍のおかげで、私にとって学びがあるはずだと思い、皆さんのお話を聞きながら、それぞれの分野でいろいろと苦戦しながら頑張っているのが、再発見できてすごくよかった。

今、この一年間を振り返って、「ａｆｔｅｒコロナ」と言われたりしているが、おそらく、コロナ禍の前には、絶対、戻れないというイメージを持っている。高松市のいろんな企画を見ていると、海外からのお客さんをどういうふうに取り込めるかということに大きく注力しているが、もし、呼び込めなかったらどうするのかということが、おそらく、ここに関わっている皆さんも、これから考えていく必要があると思っている。そこで私が思っているのが、やはり、まずは地元愛。皆さんがお話した、高松市に住んでいる人達は、文化やいろんな面で本当に恵まれた環境にいて、それをより知ってもらう努力をこれからもしていく必要がある。私が関わるプロジェクトは、ビジョンでいうと「誘客促進事業」というプロジェクトで、航空便を持つ他の国とのつながり、物産の取引をするようなことを、力を入れてたくさんの人が取り組んでいたのだけれども、同じようにできるのかと疑問に思っている。盆栽のところで輸送の問題があると聞いたが、いろいろなところで、実は必要なものが手に入らない、海外に送りたくても送れないと、何か月もかかっており、ものが動かない。もちろん、前の様に戻ったらよいのだが、もし戻らなかったらという場合も考えて、大分違うビジョンを想像する必要があると思う。

私が思ったのは、前の形はどんどん飛行機などを使う一方で、今、日本は化石燃料を使うのをなしにするとしているので、すごく正反対の事を言っているような、矛盾があるように感じる。それをじゃあどうすればいいのか、私は答えを持っていないが、皆さんの今日の話の中に大き

なヒントがあるように感じる。日本に住んでいる皆さんが、お互いにサポートしあうというか、支えあいながら、地元のものをどうにか生かして本当になくしてはいけない。ここの文化が、本当にみなさんの心の支えになっていると思うので、なくさず、生かす。そこから、「ビヨンドコロナ」で展開させるにはどうしていけばよいのかをこれから考えていけたらと思っている。

【会長】
　私も今の御意見に賛成で、コロナ禍前に戻るということはほぼありえないとすれば、これまでのような成長戦略の先というものをプランＡだとすると、そうでないプランＢあるいはプランＣぐらいまでを考えながら、創造都市というものを再設計することができるかもしれないと思っている。世界的に見ても、やはり、ＳＤＧｓという２０３０年までの大きな目標があり、これはカーボンをニュートラルにするという話だけではなく、地球の未来がかかっているものである。そうすると、これまでのような大量生産、大量消費、大量物流というもの一辺倒で考えられない。コロナ禍というのは、まさに人類に対する大きな警鐘なわけであり、その先をどう設計するかということを等しく問われている。それに対する我々なりの回答を議論しながら進めていくことになるように思う。

【委員】
　私自身が、今回のコロナで実感したこととして、高齢者と接することがとても多く、施設のデイサービスで支援をさせていただくということを、なんとか、休まずに続けさせていただいていた。その方々もとても元気で、アクティブシニアの人たちが増えており、元気な高齢の方が退職されて第二の人生、第三の人生で何らかのことをしたいという方がとても多いのに、その方々がコロナ禍を理由に辞めざるをえないか、これを機に辞めるということがある。今までの流れやいただいた資料を見ると、高松市では幸いにもたくさんの同志を得てたくさんの事業をしているが、若い人たちのポテンシャルがついていかないという現状があることをすごく感じている。
　私も音楽に携わる者として、団体に１０年近く続けた時期もあったが、結局は続かなかった。辞めた理由が、みんなと同じ温度で歩けない

ということである。その１つは、文化芸術に対して、高松市は理解を示して創造都市の推進を掲げているのに、芸術家の一人一人がすごく冷めている。例えば、今、中央卸売市場でたくさんのアートな取組が開かれているが、じゃあそこに協賛しようとか、具体的な案がもっと出てきたらよいし、それも行政主導だけではなくて、できれば、市民の方から「こうしたらよいのではないか」という知恵をつけさせていただけるような、そういった仕組みづくりができないかと思っている。例えば、今、学校の先生方に朗読を教えているが、その人たちが将来的には先生を辞めたら、地元の子どもたちに話を伝えるなどといった目標を見出していただくように、今、高松にいる人材の能力をもっといろんな形で、縦横斜めとかマス目があったら、ビンゴではなくて、一つ飛ばしでもいろいろと組み合わせて、それを何かの形にして高松独自のものを積み上げていって、継続的に何かやっていけるものがあったらいいなと模索してやってきているところである。

もう一つ思うのが、元気なアクティブシニアの皆さんともっと関わりをもっていけないかということである。例えば、先ほどの話にあった那須与一は、オペラに関わってきたものとして分かるが、時代物のヒーローは、私たちが住んでいるその土地に伝わる、共感できる身近なヒーローであり、そういったストーリーを土台に、その土地ならではの文化芸術を作ることができないかと思っている。

創造都市が広がる中で、絶対的に高松市に足りないと思っているのが、自分たちの力で自立してプロジェクトを進めていく力だと思う。それを何とか行政の力を借りて、もっとやっていく気持ちにならないと、コロナ禍とかそういう問題ではなく、続かないのかなと思う。もちろん、理由はいろいろあると思うが、それに負けている気がしている。

【会長】

若い人たちの力をどういうふうに動かしていくかという御意見だったが、この高松市の創造都市に係る会議では、高松市創造都市推進懇談会という４０歳未満の人たちで構成された会議があり、そこからの提案でいろんなものを動かそうというアイデアが生まれるなどしている。最近のＵ４０の取組について報告を受けてこなかったが、もし、時間があれば事務局から、今、Ｕ４０の方でどういう議論をしているか紹介して欲しい。

【事務局】
　Ｕ４０については、本審議会と同様に任期替えが行われ、５期目の任期が開始しているところであるが、第１回目の会議は２月２２日に開催予定であり、これから議論が始まるところである。また、３月にも会議が予定されており、コロナ禍の中でも活動が継続していく予定であるので、報告できる内容があれば、別途、御報告させていただく。

【委員】
　私自身もこの創造都市に関わり始めて、金沢って改めてよいなと思っている。結局、このまちだからとは関係なく、市長自身の思いが金沢市の計画にそもそもあふれており、私が感銘を受けたのは、山出市長の「もう一度川を都市に呼び戻す」というような事業に取り組まれていて、それは、今、２０年経って豪華な花を咲かせていると思う。「この建物は、昔はもっと長かったのだな」というような良さがまとまっていくと、創造都市としての歴史に関わらず、しっかりと意識が高まっていくというふうに思った。
　なので、できれば、もっと地元側というか高松側のこの会議でいろいろ発言はさせてもらっているが、なかなか実現には至らないというのが多く、私自身、５期目を迎えてこんなふうにやれたらよいなと思っていた１つが、市の職員の５年目だったり１０年目だったりの人たちに、職員研修で、何か金沢市の創造都市に関する講義や何かその一人一人の考え方を創造的にするようなプログラムをやらせてもらえないかということを昨年申しあげたところ、検討するということで事務局から回答をいただいている。あともう１点は、公共空間であるが、それは都市整備局の所管で、こちらの創造都市推進局とは別だと言われてしまうとそれで終わってしまうのだが、そういった金沢市の伝統空間を重要視しながら変えていくということが大事だと考えている。例えば、大分ではコロナで道路空間の占有料を免除するということも取り組んでおり、保育所なんかも道路を上手く活用する方向に進めている。やはり、公共空間を再生する上で、創造都市の議論が含まれるように見守っていきたいと思う。

【会長】

一旦、ここで議題（２）の説明を受け、そして残りの時間で、再度、意見をいただきたいと思う。

議題（２）新型コロナウイルス感染症の影響と主な対応について

【事務局】
（配布資料について説明）

【会長】
様々な面で、日本の中心地がしばらく我慢をしなければならない一方で、皆さんからビヨンドコロナ、アフターコロナに高松の創造都市をどのようにしていくかということについて議論を深めようという話もいただいた。その中では、特に、若い人たちの自発的な取組を促すという話もあったが、こういう状況だからすぐには難しいだろうと思われるので、これについてはＵ４０の動きも含めて、今後、この審議会の場においても、是非、意見交換をするあるいは情報を流してもらうという形にしたいと思う。
また、金沢市の創造都市については、市長や委員や経済界の代表などを中心にした取組が約２０年の月日を重ねており、金沢の経済同友会というところに創造都市会議の事務局があり、２０年間の記録が出版してあるので、高松の商工会議所か同友会には届いているかと思うので、是非、参考にしていただけるとありがたいと思う。それから、金沢市の創造都市の前半は山出市長さんで、後半は山野市長さんと２代の市長に渡って創造都市施策を進めていただいた。それでちょうど入れ替わりぐらいのタイミングで、ユネスコ創造都市の認定を受けるということにもなったので、大西市長にも高松市もユネスコはどの段階で入られるのかということでは、時々、提案させていただいており、事務局の方も御存知だと思う。現在の大西市長さんも、金沢市がとった施策を非常に深く研究されていた。おそらく、高松型の創造都市ということで「創造都市推進局」という組織は、日本で唯一高松だけ持っているスタイルである。そこに皆さん方の英知を加えていくという形になっているが、それをさらにもっと機動的にしていくということでは、おそらく、いくつかの実験的なプロジェクトが必要だろうと思われる。芸術士派遣事業も、ある種、実験的な形で取組が進んでいき、ここまで大きくなっていったわけ

である。そういう、この１０年ぐらいの歩みをいったん切り替えてみて、到達点と今後の課題というのは、審議会の場だけなく、もうちょっと市民的な場で議論を深めていくのもよいかもしれない。そんなふうにもしたい。

それから、都市の文化景観ということで、これについて金沢市はこれに長い間取り組んでいて、伝統環境保存条例というものが、５２年前にできている。日本で最初に、自治体のレベルでまちの景観を良くしようということを決めた。都市景観というのは景観条例できちんとみんなで守らないといけないということで、初めて伝統環境保存条例を作り、そして１０年前に景観条例の制定に至り、通算で５０年経っている。そういう長期に渡るまちづくりというものと、ユネスコ創造都市というグローバルな動きもうまく取り入れて、両方が質の高いものにある。

【副会長】

高松は素晴らしいところであるが、若者が県外に流出しているという状況の中で、専門職短期大学の設置を応援するということはとても大事なことだと思う。４年制大学もしっかりとある中で、専門職短期大学という新しい取組にも力を入れていただき、若者に定住してもらうような取組を推し進めていただけるとよいと思う。

商工業の立場としては、経済が一番ということなので、イベントなどは感染症対策をしながら、是非、進めていただきたいと思う。新しい取組として、ジャパンパラ陸上競技大会が今年の４月に開催され、那須与一の話も令和４年度にあるということで、是非、積極的に進めていただきたい。

【会長】

専門職大学に関しては、今、平田オリザさんが城崎温泉がある兵庫県豊岡市で芸術文化観光専門職大学の学長になっている。これは兵庫県立で、兵庫県の井戸知事と豊岡市の中貝市長、そして平田オリザさんの３人が知恵を出して、城崎を観光と演劇の街にしようとして取り組んでいる動きである。豊岡市はコウノトリの再生ということで、環境面で成果を上げているところ、今度は芸術文化の面ということで専門職大学の設立に取り組んでいる。本当に小さな過疎地であるが、そこに大学ができるということがそこまで来ている。だから、若い人たちが地域で育って

いくというと、専門職大学がキーワードになる時代になるかもしれず、そういった意味で、創造都市のプロジェクトに入っていることに意味がある。

【事務局】

長時間に渡り、様々な御意見をいただき感謝申しあげる。先ほどの都市景観や公共空間の創造的なまちづくりについて、市としては都市整備局と連携しながら、創造的なまちづくりのためのハードの整備をしていきたい。その上で、本審議会の委員の皆様やＵ４０の皆様にも御意見をいただきながら、着実に進めていきたいと考えている。今後、ユネスコ創造都市ネットワークへの登録も含め、まだまだ、市民の機運の醸成が必要であり、まずは、我々がビジョンに掲げている創造都市の各種事業を着実に進める中で見据えていくということであるため、引き続き、本日のように様々な御意見をいただければ幸いである。限りある時間の中で、密度の濃い審議会が開催されことについて、佐々木会長を始め委員の皆様に重ねて感謝申しあげる。

４　閉会